

今日的な社会福祉における不可解な実践(性)の吟味

—社会科学的認識視点の導入を中心にして—

末 崎 栄 司

〔抄 録〕

今日的な社会福祉の世界において、「実践（性）」そのものが一人歩きし、「実践主義」が横行している現実が、多々、見受けられる。何の制約性・拘束性も有しない「実践主義」の暴走をくい止め、社会科学的視点にもとづく社会福祉理論に導かれた「実践（性）」を取り戻す必要がある。社会科学的視点から切離され、一人歩きする「実践主義」（「実践至上主義」、「実践万能主義」）を戒め、「実践（性）」というものの正しい位置づけや役割などを取り戻し、真の科学的意味合いを有する社会福祉の「実践（性）」を考える必要がある。しかし、この「実践（性）」を否定するものではなく、そして、無視し軽視するものではない。この「実践（性）」は必要不可欠なものであり重要なものであることは言うまでもない。ただ、実践主義を戒めるものである。

キーワード：実践主義、社会科学研究方法、実用至上主義、主体性、社会福祉の思想

1. はじめに

社会福祉研究者自らが描き構想した社会福祉理論体系が極めて、そして優れて実践的であるという誇りと自信を外に向かって発信し、その社会福祉研究者自身が書き上げた本のタイトルや副題に積極的に「実践」という言葉を盛り込み、あたかも自分自身の著書は「実践には強く、実践には役立つこと」を強調している場合すら見受けられる。しかし、残念ながら、そこに表現されている実践の意味内容や概念のそのものは、実践の真の意味や真の姿からかけ離れてしまい、その実践の体系がその実践の主張者自身の主観的な分析結果であったり、思いつきで客

観性がないといった残念な結果を招いている場合もある。ここで重要なことは社会福祉理論の根底・基礎には社会福祉実践が存在し、この理論そのものがまた転じて、この実践の方向性を指し示す道標や指針になっていくということである。さらに社会福祉理論やこの理論にもとづく認識が真実か否かの判断は、人間個々人が主観的に如何に感じるかによって判定するのではなく、社会的実践の結果が客観的にどのように出るのかによって決まるということが重要ではないだろうか。結局のところ社会科学的研究法にもとづく社会福祉理論に規定されない、そして、それから遊離してしまい何らの制約もない一人歩きした実践論が横行し、科学（学問）としてはあってはならない「実践至上主義」が大手を振って現れることになるのである。また、悲しい不幸なことであるが、この科学（学問）として制止させ戒めなければならないこの「実践至上主義」に陥っていることに、意識的にか無意識的にか気付いていない場合もあるように考えられる。

そもそも、我々の生活実践は、無数の、そして様々な存在と要素の相互の絡み合いと無限で限らない変動や流動の中で、表面的にみると簡単に解きほぐすことができない複雑で錯綜した混乱状況のもとでありながらも、何か一つの方向性や選択を余儀なくされ、その選択や方向性にもとづいて、ある特定の方向へ歩み進んでいくという現況の中に身が置かれている。こうした、表面的に見ると複雑に混沌として解きほぐすことを不可能に思える混乱状況の中にあっても、混沌し複雑に見える我々の生活実践であっても、そのような状況として存在し変動し流動することを必然とする因果関係に結ばれていて、その原因と結果を解明できるならば、そこからその因果関係の中にうごめいている法則性を発見することができるのである。これらの状況と過程を客観的に観察・分析して、体系的に整理・取りまとめたものがこそが理論である。

そこから、社会福祉理論における実践性の基礎はその理論の客観性であり、その客観性を欠落した実践性は意味のない空虚なものに墜落して行かざるを得ない。どんなにちっぽけで小さく見えるような実践であっても、それが現実的で実際的である以上、実践は理論そのものの基礎に位置づけられ、その理論の確かさや正確性を検証する要件となるのである。このことの重要性を論じていきたい。

2. 社会福祉実践の現況

社会福祉は理論ではなく、愛情に基づく行為や活動であり、実際的な現実的な体験そのものであるという抽象的観念が、近代的な社会福祉の創成期における我が国の社会福祉従事者の基本的な考え方であった。こうした考え方の流れは現代の我が国における社会福祉という世界にも積極的に浸透し、脈々と引き継がれ賛美されている。その中でも中心的に社会福祉施設の中での福祉実践の立場から理論というのは福祉現場では意味がなく役に立たないとか、理論を論じる者はあたかも福祉現場の事情を知らないといった表現を基にして、理論への不信感と理論

に対する否定性という方向性が導かれ、理論への懐疑心の志向が訴えられるのである。けれども、真の意味において福祉実践に有用で、そのための指針や道標になりえるような理論の出現を待ち焦がれていることも、その根底には存在することを見失ってはいけないはずである。また、逆に社会福祉の理論を論ずる社会福祉研究者の方も、福祉実践の考究に対する強い情熱と関心、さらにはそれへの探求の意欲を表明し、そこから社会福祉研究者自らが描き構想した社会福祉理論体系が極めて、そして優れて実践的であるという誇りと自信を外に向かって発信し、その社会福祉研究者自身が書き上げた本のタイトルや副題に積極的に「実践」という言葉を盛り込み、あたかも自分自身の著書は「実践には強く、実践には役立つこと」を強調している場合すら見受けられる。しかし、残念ながら、そこに表現されている実践の意味内容や概念そのものは、実践の真の意味や真の姿からかけ離れてしまい、その実践の体系がその実践の主張者自身の主観的な分析結果であったり、思いつきで客観性がないといった残念な結果を招いている場合もある。それゆえ、こうした恣意的で主観的な判断に基づく実践の体系は、如何に実践的であることを自信たっぷりに自慢しようとも、結局のところ実践の本来の意味・概念からはほど遠いものがあると言わざるを得ない。けれども、どちらにしても今日の社会福祉の世界において理論との統一が求められていることは確かなように思う。

こうした要望や期待に応えるためには、ある個人の発想が主観的に恣意的に実践的であると論ずることではなく、その理論そのものがはたして存在と、それを成り立たせている因果関係の客観的・科学的認識によって体系化され整理されているかが問われ、そこからその理論が客観的な普遍的妥当性を有しており、また、それが、一体、どこまで実践に耐えうるものかどうかの検証が行われなければならない。

ところで、我々人間にとって人間の問題を取り上げる場合の基本的な前提は、明らかに現実には生きている人間という個体の生存であり、人間の現実的な生そのものである。この人間の「現実的な生」は人間の問題を考える場合の基本的な前提であり、その前提自身みずからが実践的でないということを意味しているのである。その「現実的な生」を科学（学問）と理論は対象化して認識し把握しなければならない。それ以外に認識把握の仕方はないと言える。換言するならば、科学と理論の認識把握したいものは「生そのもの」ではなく、「対象化された生」であるが、科学的認識・客観的認識においては、人間的な生の現実とは「対象化された生」以外に認識把握の仕方・方法はないのである⁽¹⁾。けれども、その認識把握の仕方・方法によってのみ初めて人間存在の客観的認識が成立し、事物の因果関係が解き明かされていくことになる。

そして、今、考えなければならないことは社会福祉実践であることは言うまでもないことであるが、まず、そのことを分析する場合に重要なことは、社会福祉の本質的な立場から見てみると優れてそのことは歴史的社会的実践でなければならないことであり、次に頭の中に入れておかなければならないことは社会福祉という分野・断面・領域の実践であると言える。このうちの前者の「歴史的社会的実践」からは、人間の問題を取り上げるとき、人間とそれを取り巻

く人間関係の存在を基本的に根底から制約づける歴史性や社会性といった歴史的社会的規定性を見無視し除去することは、「人間的な生の現実」にとって本質的に非実践的な発想となってしまう、階級的認識がこの実践という枠組みの中に注入されなければならない必然性があることを理解する必要がある。そして後者の、今、考えている実践が社会福祉という学問上の一分野・一断面であるということは、まず、社会福祉そのものが何らかの社会問題対策の一体系である限りにおいて、その社会問題とそれへの対応策の体系であるという社会科学的認識と社会科学研究方法がその社会福祉実践の中に欠落しているならば、その実践とは非実践的な活動・行為とならざるを得ない。

今、述べたような根本的な制約や約束事項を有し不可欠とする社会福祉実践の基礎から歴史的で社会的（経済的）な存在としての社会福祉というものが、どのように成立し存在してきたのかなどという因果関係の究明と論理的認識の獲得、そして、そこから理論の形成と、さらにはそこにうごめく法則性の発見と認識が試みられていくことになる。そのようにして発見され形づくられていく理論と法則性はすぐれて社会福祉実践の指針となり道標として存在し、その実践の方向性を明示し提示することになる。しかし、人間の現実的な生は、はじめもなく終わりもなく、どこから来て何処へ行くのかも知らず、絶え間なく流れ固定することを知らないまま、同時に人間それ自身がお互い結ばれあい、限りない互いの相互関連的に織り込みがなされていることから、そこから理論は絶えず流動する実践によって検証や点検を積み重ねていき、不明確で未知の部分の究明、ならびに誤謬の発見と修正を行いながら、実際的で現実的な真理の解明と到達に限りなく接近していかなければならない。すなわち、ここで重要なことは社会福祉理論の根底・基礎には社会福祉実践が存在し、この理論そのものがまた転じて、この実践の方向性を指し示す道標や指針になっていくということである。さらに社会福祉理論やこの理論にもとづく認識が真実か否かの判断は、人間個々人が主観的に如何に感じるかによって判定するのではなく、社会的実践の結果が客観的にどのように出るのかによって決まるということが重要ではないだろうか。

けれども、ここで注意しなければならない点は、社会福祉理論と社会福祉実践とを統一的に理解しようという場合、絶えず存在・現象・事物、さらには「生きた人間の現実的な生」といったものの表面的・現象的・部分的な側面やその中の連関性だけに目を奪われるのではなく、それらを包含する本質的・全体的・内面的な仕組み・構造やその中にうごめく関連性に制約づけられ拘束さるということである。換言すれば、存在という現象を一つの手がかりとして、その現象の根底に奥深く存在する本質（全体像）を探り出し、その探り出した本質を起点としてその本質そのものが何らかの形態や形の姿に変化し転じて外（表面）に表現されたものとして現象を見直していくという下降と上向の矛盾的統一関係において理解することが大切となる⁽²⁾。だから、社会福祉実践という社会福祉の学問的体系の一部分は社会福祉という学問的体系の全体（本質）から切り離された意味内容での一部分ではなく、一部分は一部分として相対的に独

立性を保持しながらも、同時にその学問的体系の全体（本質）の影がその一部分に投影されているものとしての一部分として存在していることを捉えることが極めて重要となる。社会福祉実践を考える場合に、この点が重要になってくるように思われるのである。

さらには、今日的な我が国の社会福祉という学問的世界を眺めてみると、社会福祉理論と、社会福祉実践の概念が如何に乱雑に素朴に、そして主観的に恣意的に取り扱われてきている現状が目立つようになってきていると思う。例えば、経験主義的な意識や認識が、顕在的にか潜在的にか社会福祉実践の領域や場面で停滞的に残っており、そのことが社会福祉理論の軽視や無視に繋がっている場合もあるように思われるのである。それよりもアメリカ的な社会福祉理論に習って福祉実践の背負い手としてのソーシャルワーカーが、福祉専門職の立場から行う臨床的行為のみを社会福祉実践だと思い込み、この実践の概念を歪曲化したり矮小化したりして、同時に超歴史的な研究方法論をとる社会学・心理学・精神分析学・精神医学などに学問的基礎を求め、そこからそのような科学的立場から意識的に感情的にか社会科学的研究方法論⁽³⁾にもとづく社会福祉実践は本来の実践ではないと独断的に判断し、そこから脱出できない場合もあるし脱出する意欲や意思もない場合も多いように見受けられるのである。表面的には実践的であるかのような錯覚に陥って、本質的に非実践的な研究方法論にもとづく社会福祉実践の指導が非実践的に行われている事象も存在する。ただ、ここで気を付けなければならないことは、この場合のアメリカ社会福祉の多大な影響を受けた我が国のソーシャルワークの意義や存在そのものを否定するとかソーシャルワーカーの実践を否定するといった論証ではなく、これらの社会福祉の学問的な一領域が、社会科学的研究方法によって再構築され再論証化し、さらには再理論化されなければ、真実の意味において実践的ではあり得ないことを言っているだけである。

これ以外にも、個々の具体的な行為や現象を細切れにして、そのことの有用性や実用性からもたらされる結果によってのみ評価・判断し、その有用性や実用性を結果によって判断していく過程を展開していくアメリカの実用主義の考え方・思考方法がこの上に覆いかぶさりながら、社会福祉という歴史的社会的な色彩を強く帯びた存在の生成・発展の必然性を見失い、そこからその社会福祉の社会的役割や社会的任務が如何なる理由に起因して登場してくるのかという客観的認識・本質的認識が脱落してしまい、そこから技術主義的な傾向が強くなり、社会科学的研究方法にもとづく社会福祉理論に導き出されない誤った実践に陥り、結局のところその社会科学的研究法にもとづく社会福祉理論に規定されない、そして、それから遊離してしまい何らの制約もない一人歩きした実践論が横行し、科学（学問）としてはあってはならない「実践至上主義」が大手を振って現れることになるのである。また、悲しい不幸なことであるが、この科学（学問）として制止させ戒めなければならないこの「実践至上主義」に陥っていることに、意識的にか無意識的に気付いていない場合もあるように考えられる。他面、こうした実践万能主義的な考え方からは、社会科学的研究方法にもとづく社会福祉理論は「社会福祉とい

うものが伝統に有している特性としての個別性や主体性を、はなっから無視・軽視さらには欠落している」ところの経済主義であるとか客観主義であるとか、極め付きは基底還元主義だとして批判してくるのであり、そこからソーシャルワーク（社会福祉援助技術）とその利用・活用によって芽生え成り立つ社会福祉本来の実践を、軽くみる役に立たない実用価値のない抽象論であると拒否反応を示し痛烈に批判するのである。

こうした批判を唱える経験主義者や臨床主義者の立場からは、自分自身の自らが寄って立つ立場のみが真実の意味における実践であると誇示し志向し、さらには信仰しているところでは非常に残念なことではあるが、現象と本質、外面と内面、特殊と普遍、部分と全体、主観と客観などといったものの関係性に関する矛盾の統一性や位置づけが忘却され誤認されていると思われるのである。すなわち、このような転倒した考え方とそこから織り込まれ築き上げられてくる理論体系は、人間とそれを取り巻く人間関係とは歴史的社会的な存在であるという認識理解を基本的・前提的に脱落してしまい、それゆえ社会科学的研究方法にもとづいて社会福祉理論と社会福祉実践に向けての接近を拒否し、あるいは、見失ってしまっているところに、社会福祉そのものの真の実存とその本質を掴みきれていないことを、自ら吐露し嘆いていることにほかならないであろう。すなわち、社会福祉理論における実践性の基礎はその理論の客観性であり、その客観性を欠落した実践性は意味のない空虚なものに墜落して行かざるを得ない。どんなにちっぽけで小さく見えるような実践であっても、それが現実的で实际的である以上、実践は理論そのものの基礎に位置づけられ、実践はその理論の確かさや正確性を検証する要件となるのである。

3. 実践主義の内在的問題点

我が国の今日的な社会福祉の世界では、一口に実践（性）と呼ばれている概念が、よく観察すると、いろいろな内容や性格、および特質によって彩られていることに気付くのである。その実践（性）の概念についてのさまざまな意味・性格・特質・内容について、以下のように社会福祉の実践（性）についてのそのことが認識把握される場合が多いのである。

まず第一に、社会福祉従事者の自分自身の行動範囲内での狭い経験や実際的な体験を唯一のよりどころとして、人生体験や個別事例が収集され集積され、それらの総体・全体だけが実践（性）の意味内容や概念にふさわしいと主観的・感情的に独断するという誤診を行ってしまう場合である。

第二に、まるで医師が患者に対面して、問診、検査、診察、診断、投薬、手術などや、その他の医療行為（臨床行為）を行うのに似て、クライアント（対象者）に向きあったソーシャルワーカーは面接、傾聴、調査、診断、指導、助言などの臨床的行為を援助技術の知識や援助過程的知識、さらには熟練的な技術によって展開するが、それがそのまま文字どおり臨床的で

あるからこそ実践的であると誤認し、さらにその臨床的な援助技術がそれ自身で、自己完結的なものとして主観的・感情的に理解されることによって、そこからその臨床的な援助技術がそれに適用されるはずの本体(本質)、さらにはその本体(本質)の目的が意識に上がってこないか、さもなくばせいぜい人格の健全な発達であるとか、人間関係がスムーズにいくための意図的な調整とでもいうような歴史的社会的規定性を忘却した観念的・抽象的な認識や意識しか持ちえないような場合である。

さらに第三は援助技術が実用的・実際的であるという認識視点と自己判断に立脚して、当面の課題についてのすべての関連現象や関連要素を収集し羅列し、さらには整理し分類したものを、援助技術の目的と手段(方法)の関係においてそれらを知識として供給し、個々それぞれの現象や行為について、それが実用的ですぐに役立つかどうかを判断して、その結果に基づいて、そのことの実践(性)を主張する場合がある。残念ながら、この場合においても、人間とそれを取り巻く人間関係一般は、本質的・実質的に歴史的社会的規定性を欠いた研究方法論で分析され、行くつくところこの場合の多くはそうした考え方の中には現象的・表面的な事象についての観察と整理がなされているだけで、客観的存在の本質的・全体的な分析は欠落しているので、人間そのものとそれを包囲する人間関係の課題を機能的に現象的に解析できたとしても、その課題そのものを本質的に全人格的に、さらには全人間的に解剖し、その原因を明らかにできないであろう。

第四は、今まで述べてきたことと関係しているのであるが、とりわけクライアント(対象者)に対面した専門的なソーシャルワーカーの「クライアントの抱える課題をどのような手続きを踏んで、どのような援助技術を用いてその課題を緩和し解決していくのかという」場合に使われる援助技術と知識の体系、さらにはその援助技術と知識を課題解決に向けて使っていく過程の体系こそが実践的であり、そこから自明の理のように「物事が何であるかを問う」こと、すなわち「物事の本質を問う」ことは抽象的であり実用的ではないと一蹴するのである。ところが、ここで立ち止まって考えてみると、例えば、一例として、ある人が「人間はどのようにして生きていかなければならないのか」と誰かに問いかけたとする。この問いは人生をどのようにして生きていかなければならないのかという、生きていくための手段や方法、さらには生きていくためにはどうすればよいかなどを問いかけているはずである。こうした「人生をいかにいきるべきか」を真剣に真面目に、かつ徹底的に問いたいのであれば必然的に「人生とは何か、人生の本質とは何か」さらには「人間にとって何が真理なのか」を考究することなしには、人間の生き方に関する知識も技術も絵にかいた餅となり、かえって非実践的なものになることが分かるはずであるのと同じで、こうした技術主義的な考え方は実践的であるかのように見せかけながらも、内実は非実践的なものとして存在しているように思われるのである。

第五は社会福祉とは人間とそれを取り巻く人間関係の調整をはかる実践的行為であるから、人間とその行動に関係する一切の学問(科学)、すなわち、宗教、哲学、生物学、医学、精神

分析学、社会学、文化人類学、経済学、法律学などの科学の知識を総動員してその研究成果を取り入れ、あるいはそれらを総合的に組織化・体系化したものとして成立するという人間行動科学とその現実的適用が必要であって、その学問的基盤を経済学という単一科学に的を絞ることはナンセンスであり馬鹿げたことであり意味のないことであり、そこから社会科学研究方法に基づく社会福祉理論は、まったく実践には効果がなく有用ではないと一蹴する場合もある。しかし、立ち止まって考えてみると、ある一つの学問的領域が科学として成り立つためには何が必要かという、ある特定の固有で独自の科学的学問的基礎の上に立つ必要があるとし、学問的諸領域の集散的・総計的・総合的な構成や編み上げをもってしては、到底、真の意味における実践に役立つという期待には応えられないのではないだろうか。それぞれ個々の学問的領域ごとにそれぞれ個別の科学（学問）が成り立つのであって、社会福祉という学問もその考え方から逃れることはできず、社会福祉学は学問体系上においては経済学の一領域といえるのではないか。ところが、ここで間違ってはならないことは、ここで言っていることはあくまでも学問の体系上における社会福祉学の位置づけや所属について述べているだけであって、決してソーシャルケースワーカーがクライアント（対象者）に直面して、何らかの相談援助を展開する場合に、精神医学が有用でないとか、臨床心理学の知識が無意味だとか、社会学や文化人類学などが不必要などと言っているのではない。むしろその相談援助を行う場合には、あらゆる学問的領域の研究成果や知識は必要でありなくてはならないものであり、可能な限り活用し利用していくことの意義を認めるものである。ここで極めて重要なことは、この二つの全く別の次元の事項をごちゃ混ぜにして、社会科学的視点に基づく社会福祉理論は基底還元主義的であり、経済主義的色彩が強く、そこから正当性がなく意味がないと批判される場合が多いのである。だから、ここでこの両者の全く別の事柄を混同してはならないことに注意する必要がある。

そして、第六に社会生活を包囲する理想と現実、さらには建前と本音、あるいは形式と内容などといった矛盾がうごめく中で、目先の利益を狙って、その人自身の欲望と利己心の命ずるままに定まった考え方もなく揺れ動くことが現実的で実際的であると思ひ込み、そうすることが実践的であると強く言い張る場合さえある。

また、ソーシャルワークの科学的体系と、ソーシャルワーカーに必要な知識と技術との区別が混同されてはならないが、残念ながら日本の社会福祉の世界ではこの全く異なる両者の事柄が混乱的混同的に認識されていて、それらが学問・科学・理論の世界でやってはいけないことであるのだが、両者をごちゃ混ぜに混同して理解してしまうという過ちを犯してしまうのである。そこから実践についてもあらぬ誤解を招いてしまう結果をもたらしている。というのも、もともと日本のソーシャルワークに多大な影響を及ぼしたアメリカ社会福祉はクライアント（対象者）に直面した専門的なソーシャルワーカーが、どのような援助過程をスムーズに円滑に推し進めていけば能率的・効果的にクライアントを援助することが可能か、ということに関する知識と技術の体系、すなわち実用主義的な考え方に立脚した「援助の仕方」に関する知識

体系である。それゆえアメリカ社会福祉⁽⁴⁾は社会福祉の本質を因果論的に考究するための、換言すると「物事の本質（物事の何か）」を問う学問的体系ではなく、技術主義的な知識が集まった体系だといえよう。また、後者の「ソーシャルワーカーに必要な知識と技術」の方はソーシャルワーカーの立場に立って提起された、その援助過程の技術的展開に関する知識体系であるのに対し、前者の「ソーシャルワークの科学的体系」はその援助過程の技術的展開に関する知識体系をその一環に包含して存在する「ソーシャルワークそのものとは一体何か」を問う本質的な理論探究として、その両者の対比を認識してよいであろう。

こうした範疇の異なる二つの体系を、一緒に学問の名において同じ平面上に並べて、どちらかを二者択一的に選び、技術主義的・機能主義的な後者の「援助の仕方」の体系を、唯一、科学的・学問的に正しい立場として自己を表明しようとするところに大きな誤りと混乱が存在するのである。そこから技術主義的で機能主義的な社会福祉の体系が科学の名のもとに独り歩きし、そのことがより実践的であるかのような錯覚や誤診をしている状況のもとでは、真の意味において社会的実践の道標となるべき社会科学的視点に立つ社会福祉の理論体系が、かえって抽象的で基底還元主義的存在として奇妙に誤って映り、悲しいかなその批判の対象となってしまうのである。だから、こうしたことからソーシャルワーカーが兼ね備えておかねばならない知識と技術を持って、それを実際に現場で行うことが、即、正しい実践であり、その実践そのものの自体が理論（科学）であるとして直接的に無条件的に、さらに短絡的に結びつけることには、少々、無理があり、科学的論証もなく強引すぎる言わざるを得ないであろう。

4. 社会福祉理論と社会福祉実践の乖離

また、社会福祉理論と社会福祉実践との「ずれ」、すなわち、乖離とでもいうような実際に社会福祉の現場で働く専門従事者や社会福祉の実務者が、社会福祉理論に対しての期待はずれや失望をいだいて嘆いている場合が多々あり、今一つ理論とか法則（性）というものに対する勘違いや思い違い、さらには誤認といったものが、先入観的にか後天的にか、実際に社会福祉に従事する専門職者や社会福祉の実務者に残念ながら存在するように思われるのである。この点については我々の生活実践は、無数の、そして様々な存在と要素の相互の絡み合いと無限で限らない変動や流動の中で、表面的にみると簡単に解きほぐすことができない複雑で錯綜した混乱状況のもとでありながらも、何か一つの方向性や選択を余儀なくされ、その選択や方向性にもとづいて、ある特定の方向へ歩み進んでいくという現況の中に身が置かれている。こうした、表面的に見ると複雑に混沌として解きほぐすことが不可能に思える混乱状況の中にあっても、混沌とし複雑に見える我々の生活実践であっても、そのような状況として存在し変動し流動することを必然とする因果関係に結ばれていて、その原因と結果を解明できるならば、そこからその因果関係の中にうごめいている法則性を発見することができるのである。これらの状

況と過程を客観的に観察・分析して、体系的に整理・取りまとめたものが理論である。

しかし、ある特定の事象や存在を理論的に取りまとめた法則性を発見する方法として、その事象や存在に絡みついたり絡み合ったりしているが、その事象や存在にとって本質的・中核的でないものについては、一応、考慮せず捨象し、その存在や事象にとって、必然的にその事象や存在にとって不可欠で無くてはならない、すなわち、それがなければその事象や存在が成立し存在し得ないようなところの可能な限り純粋なものを我々は分析的に抽出するのが一般的である。これは自然科学であろうと社会科学であろうと同様の研究方法であり、いわゆる理想像や純粋形の姿をとって理論が形づくられてくるものである。こうした意味で抽出された理想像や純粋形の姿・相貌をもって理論が形成されるとすると、そこから必然的に我々が研究対象として取り上げる社会福祉という学問における理論と実践との関係性や結ばれあい方を考える場合においても、容易に解きはぐしがたい複雑に錯綜し入り乱れた直接的・間接的な要素や条件、さらには契機によって存在している現象そのものに、的確に一寸たりとも違わないでぴったりと寄り添い、如何なる微々たる狂いも許されないなどという理論を心から期待し望んだとしても無理なことであり、むしろそのことを想定することの方が無茶苦茶な願望だと言えよう。それゆえ現象が左や右に揺れ動き、上や下に変動し、そこから現象が本質・法則性から遠ざかりかけ離れて行くことがあっても、現象・存在が絶えず求心的に吸い寄せられる中心こそが理論であり法則性であると言える。

ここから社会科学的研究方法にもとづく社会福祉理論の提示に対して、実際の社会福祉の現場や社会福祉の専門従事者から、その理論は社会福祉実践には何ら役に立たないという批判が投げられる。確かに、そうした社会福祉の施設や専門従事者といっても、施設の種類や性質にも様々な相違があるが、多くの場合、職業的労働として雇用され、クライアント（対象者）のために何らかの社会福祉サービスを献身的に直接的に供給する第一線で活躍し業務に携わるソーシャルワーカー（社会福祉の専門従事者）が中核であり中軸であり、その大部分であると思われる。こうした社会福祉の現場の第一線で働くソーシャルワーカーの社会科学的研究方法にもとづく社会福祉理論への批判や要求は多面的であると言わざるを得ない。

その中の一つとして、まず、社会福祉の重要な性格的特質の一つである構造的合目的性という考え方は、ソーシャルワーカーの現実的な実践場面でのやる気や意気込みをくじき、社会福祉の運動的発想が出てこずに社会福祉そのものが閉鎖的で発展性が読み取れず、時代遅れであり現実には合わない非実践的なものであるという批判である。おまけに社会福祉の専門従事者が待ち望んでいる社会福祉運動論あるとか、福祉労働論といった実際的な社会福祉の向上をもたらすものも出てこないという嘆きであると言ってよい。しかし、学問的・科学的に考えて、今、我々が考えているものは直接的・集中的に見ても理解されるように、研究対象そのものは社会福祉という学問・科学であり、それに対する客観的な分析とその本質・法則性の解明であると言える。確かに社会福祉運動であるとか福祉労働とかいうものは、それに対する客観的な分析

とその本質・法則性の解明に奥深く結びつき離れがたく結合していることは、疑う余地はない。その点から考えても、当然にその研究領域に包含すべきものであろうが、しかし、ここで立ち止まって熟考してみるならば、社会福祉そのものの客観的分析と、対象者の要求を下から勝ち取っていくような実践的な色彩を有する社会福祉運動や、対象者の課題を実際に緩和・解決していくための福祉労働というものの性格、意義、位置づけなどを混同・混乱してはならないように思われるのである。なぜなら、その社会福祉そのものの客観的分析・本質的分析と、社会福祉運動や福祉労働とは次元の異なる事柄であり異質ものであるからである。ここで注意しなければならないことは、こうした概念や実態の異なるものの区別を厳格にしなければならないことと言っているだけであり、決して社会福祉運動や福祉労働を軽んじているのではない。こうして社会福祉の専門従事者は、社会福祉の客観的認識つまり社会福祉の重要な性格的特質の一つである構造的合目的性という考え方と、社会福祉の専門従事者自身が社会福祉にかけている主観的期待・主体的取り組みとの関係づけという、この二つの次元の異なる別個の課題の結合・統一を短絡的・直結的に行うべきではないし、かつ、そうすることは社会福祉を客観的に分析するという学問・科学の本来からの姿から遠ざかり、行き着くところ本質的な理論から自らの足を踏み外す結果を招くことになる。だから、繰り返しながら先にも述べたように社会福祉という学問における理論と実践との関係性や結ばれあい方を考える場合においても、容易に解きほぐしがたい複雑に錯綜し入り乱れた直接的・間接的な要素や条件、さらには契機によって存在している現象そのものに、的確に一寸たりとも違わないでぴったりと寄り添い、如何なる微々たる狂いも許されないなどという理論を心から期待し望んだとしても無理なことであり、むしろそのことを想定することの方が無茶苦茶な願望だと言えよう。それゆえ現象が左や右に揺れ動き、上や下に変動し、そこから現象が本質・法則性から遠ざかりかけ離れて行くことがあっても、現象・存在が絶えず求心的に吸い寄せられる中心こそが理論であり法則性であると言える。社会福祉運動や社会福祉労働というものが、いかに対象者の抱える課題の緩和・解決には実践的には有用であり有効であったとしても、社会福祉という学問を客観的・科学的に分析していくことが本来の使命であり、社会福祉の性格的特質である「構造的合目的性」の論理は社会福祉の専門従事者の働き甲斐を奪い取り、社会福祉の専門従事者が待望し期待を寄せる社会福祉運動や福祉労働の発展と組織化を拒むものであるという指摘は的を射たものとは言えないように思う。なぜなら、この社会福祉運動や福祉労働というものも、「構造的合目的性」に制約づけられ規定づけられていかなければならないし、それから逃れることはできないはずである。

そして、社会科学的研究方法論にもとづく社会福祉理論への第二の大きな批判は、補充的性格に向けられるのである。つまり、この社会福祉理論の性格的特質である補充性や代替性に批判や愚痴の矛先が向けられるということである。この批判の内容は社会福祉施設などで賃金労働者として働くソーシャルワーカーの主体的自立性や専門的な職業性の軽視、あるいは否定に繋がり、それをもって前に述べて構造的合目的性とともに関与を及ぼすという批判である。

しかし、この客観的・科学的にもとづく補充性的性格は、社会福祉という学問そのものに固有で独自の性格的特質の分析であり、これを認めその補充性の秘密を解きほぐすことを拒否したり、そのことを解明できない理論は、社会福祉理論としては失格であると言える。そしてここでもまた社会福祉の専門従事者の実践に向けての主体的期待や主体的意欲の盛り上がりだが、社会福祉についての客観的・科学的な事実を歪曲し、逆に見失わせ、そこから社会的に自然で客観的・科学的な見方・考え方をかえって主観的・感情的な印象や評価とすり替え、そのことを社会福祉の軽視・軽蔑として意識そのものに反映しているのである。それゆえ要注意点としては社会的存在に関わる客観的・科学的認識と主観的・感情的・恣意的な評価とを混同したり、前者を後者に観念的な論理ですり替えてはならないということである。

また、一見すると糸が繚れ複雑に絡んでいるように見えるがごとき、我々人間の生活は無限で多彩に入り乱れており、簡単に解きほぐし難く見える「人間的な生の現実」を客観的・科学的に対象化して、その中に潜在する因果関係を分析的に抽出し、そこからその因果関係の中にごめく法則性を探究することこそが科学・学問の使命であり、究極的な役割であり任務であると言える。そうした過程を客観的に認識理解した体系こそが理論となる。社会福祉理論もまた人間とその人間を取り巻く人間関係の、ある一定の歴史的発展段階のもとで、人間とその人間を取り巻く人間関係を織り込みながら編み上げ、同時にその編み上げられたものによって制約づけられ拘束されながら成立してくる資本主義制度の仕組み上の矛盾から産出される社会問題への対応策として、歴史的社会的な視点から客観的・科学的に、そのことの因果関係とその中にごめく法則性を探究するために社会福祉理論は構成されるものである。当然に歴史的社会的存在としての社会福祉において解き明かされた因果関係の客観的認識とその体系的把握にこそ、社会福祉が科学・学問として、自分自身を自ら主張し誇示することができるための科学的・学問的根拠があると言える。

今、一度ここで立ち止まって考えてみると、「人間的な現実的な生」とはその生々しい生き姿をそのありのまま認識理解し体得することは、何か宗教や信仰が取り上げる課題や問題であっても、決して科学が取り上げる課題や問題ではない。一般的に科学という名のもとでの真理の探究とそれへの接近方法とは、明らかに事物・存在・現象を客観的に対象化することによってのみ、初めて科学として認識理解することが可能となり、そこからその事物・存在・現象を対象化していくという科学的認識・客観的認識そのものの過程が、そのまま人間における人間にとっての人間の持ち得る主体性の喪失・排除の過程であり状況であるという思わぬ誤解をされる場合が多いと言える。

つまり、社会福祉理論においても、社会福祉の社会科学的研究方法は科学として尊重され、その研究方法によって理論構成が推し進められなければならないが、しかし、そこではその研究方法が客観的認識を至上命令とするところから、人間そのものが見失われた論理体系となるので、その人間不在を取り戻すために慈悲・人間愛などといった宗教的・倫理的・心理的な人

間的・主体的要素を取り入れ注入する必要があるとされるのである。こうした苦言は社会科学的研究方法に対する誤った認識と不十分な理解に起因して表明されるものである。こうした社会福祉における主体性の強調は、ソーシャルワークにおける自主性や自己決定に関係して、やる気や生きがいをクライアントの内面から心理的・精神的に呼び覚まし内から湧き出させるために、自己決定とそれにもとづく自主的行為ができるようになる指導、あるいは、何らの指導的援助をしないことを社会福祉の主体性と呼んでいる場合がある。この場合の個々人の内面的・精神的な側面における性格や情緒、さらには精神力を強くし、周りの環境および人間関係にうまく溶け込めるようにするために、クライアント自らの主体性を増強することが大切であるとソーシャルワークを主張する人は唱えるのである。そして、こういった主体性の中にこそ優れた実践性が存在するのだという非科学的な主張や論調がまかり通っているのである。この主張や論調のもとでは、明らかに社会福祉の重要な科学的根拠であり性格的特質である歴史性や社会性がまったく脱落していると言わざるを得ない。

その上、さらに社会福祉の主体性論が社会福祉思想の基礎的基盤のうえに提起される場合がある。すなわち、この立場にもとづくと、社会福祉そのものの思想こそが何よりも社会福祉実践を志向する主体性を根本から支える支柱的論理であり、その根底を流れる意味や思想という土台の上に社会科学的認識理解が支えられることによって、はじめて社会福祉における主体性と実践性が確実に論理性をもって保持できるとされる場合がある。つまり、社会福祉の思想こそが、社会福祉実践を導くところの「主体性」という人間そのものをその実践へと動かす内面的・内在的な動機であり契機であるとされるのである。このことはその思想こそが、実践を志向するところの「主体的な内在的論理」であるとされ、その底流に流れる意味や思想の土台の上に社会科学的認識が支えられることによって、主体性と実践性が確保されるという論理である。実践の根底にはそれを動かす動機となる主体性があり、その主体性は思想によって支えられているのであり、こうした思想という根本に存在する土台にもとづいて社会科学的認識が支えられることによって、はじめて主体性や実践性が確保されるという理解である。ところが、優れて理論的なものは、それ自身、優れて実践的であることを忘れてはならない。すなわち、実践を基礎として積み上げられ編み上げられた理論は、それがまた実践の指針として役立つことになるのである。主体的なものが客観的なものの中に投影され自己実現されていくという意味においては、客観的なものは主体的なものを対象化したものの表現にほかならない。そうであってこそ理論はそのまま実践であることができるのである。それはまさしく、感情が概念（意味内容）の中に注入され自己実現することによって、はじめて真の感情（意思）となることができるのと同じことである。

すなわち、社会福祉という学問において主体性を誇示し強調するならば、社会福祉の客観的認識の確かさの中に主体性自らを注入し投入し、その理論を検証し、過ちや誤診がなければその上に立って深化と前進に備え、もし、過ちや誤診があれば理論を修正することによって理論

の完成に邁進し、そうした全体の中で社会科学的法則性（社会経済法則）の指示によりながら、日常の社会福祉活動（社会福祉実践）を展開すればよいことになる。そこには客観性と主体性との分裂や不自然なやり方での両者の結合や、偽りに満ちた両者の統合などは必要ないように思う。客観的のものが主観的なものを客観的なもののうちに溶け込ませて、主体的なものを客観的に対象化しているからである。それこそが社会福祉という学問における真の理論と真の実践の統一であり、実践という土台の上に探究され洞察され論理的に整合化された理論が実践の羅針盤として体系化され、それに規定づけられ方向づけられた実践が社会福祉そのものの学問的水準を高め、内容の充実を具体化していくのである。そこには思想（世界観）がこの論理的過程から遊離したところに、先天的に生得的に存在しているのではなく、人間的な生の全現実を、そのありのままに、すなわち、そのあるべき本来の姿で表現されるはずのものとして、社会生活の実践を基底とする、実践と理論との相互交流の中から思想（世界観）が昇華され、それをもって同時的に、まさしくそこから思想（世界観）が結晶していくものであり、それゆえ思想（世界観）それ自身が流動し発展していくものとして、常に絶えず理論と実践との相互の検証にさらされているものであり、そうであることによって究極的に思想（世界観）と科学（学問）は統一されたものと存在しているものなのである。

思想と理論と実践との関係性は、次のようになるのではないだろうか。繰り返しになるが、そもそも生々しい「生の現実」や「現実的な生」は、無限の流動と相互依存関係の中であってそのありのままの姿において人間そのものは掴み取ることも認識理解することもできない。すなわち、人間にとってそれを掴み取ろうとする主体的な行為や過程こそが、「生の現実」であり「現実の生」であって、掴み取られた生は対象化的に認識把握された客観的な生にはかならないからである。そこから思想、世界観さらには価値観も、それらが生活実践の科学的・理論的な検証や検討に十分に耐えうるものでなければならず、その論証の正しさによってのみ、それらは一つの理想型を形づくることになる。換言するならば、それら自身を、人間が主体的であると呼んでいる思想、世界観さらには価値観も、「生の現実」・「現実的な生」の客観的な対象化認識の所産であり、生活体験と知的認識とによって形成され、試行錯誤的に修正されつつ、次第に理想型的に成熟し真理に接近していくのであって、人間の生活実践は遊離した形而上的世界から人間に対して先天的に生得的に降りてきて、人間の頭脳と悟性の中に沈澱し固着するようなものではない。このように思想や世界観は、それ自身のみが実践への志向性を有しているものではなく、それは生活体験と知的認識という生活実践の所産以上のものでもないし、あるいはそれ以下の何物でもなく、そこから思想や世界観とは生活実践の因果関係の解明、さらには、もっと突き進んで言えば生活実践を基盤・土台とする理論と実践との矛盾の統一関係の中から生成し発展し、そして定着・固着していくものであろう。そうした中から、最も優れて完璧に完成した理想型的状況においては、思想と世界観は理論との統合・融合を成就するのである。

さらに「生の現実」「現実的な生」に対する我々の認識把握は、それを個人的なものとして、あるいは個人的な次元においてではなく、それを歴史的・社会的な存在として、そういった次元の課題として取り上げようとしているのであること再確認する必要がある。それゆえ、ここでは必然的に生活実践とは、それ自身がそのまま人間の歴史的・社会的実践を意味するものであり、その限りにおいて「生の現実」「現実的な生」とは流動と相互依存関係に置かれている人間的な生そのものが、歴史的・社会的に規定されそのように規定されながら存在し、そのように変動する真理の歴史的・社会的に客観的で対象化的な認識理解であり、そのように志向しそのように創造する歴史的・社会的な、すなわち、また階級的で労働者のな人間の主体的な行為と過程との矛盾の統一においてのみ存在しているということである。こうして客観性と切離された主体性は何処にもあり得ず、主体性は客観性の中に自己実現することによってのみ、主体的であることができるのであるが、その際、主体性にとって歴史性と社会性が織り込まれていることによって編み上げられていること、すなわち、労働者と階級性の自覚と行動が浸透しているのだからなければならない。

5. マックスウェバーとカールマルクスの主体性と思想

さらに、社会福祉の主体性論が社会福祉思想の基盤の上に提起される場合がある⁽⁵⁾。この立場によると、社会福祉の「思想」こそが、「実践」を志向する「主体的」内在的論理であり、底流としての意味や思想の土台の上に社会科学的認識が支えられることによって、はじめて主体性と実践性が確保されるという論理であり思考方法である。この場合の「実践」とは、優れて歴史的社会的実践でなければならないし、「思想」とは具体的実際的には近代的精神を意味しているが、それも思想性の浸透した実践的なものが要求されているのである。この考え方は、何かマックスウェバー的な捉え方とカールマルクスの捉え方が思いつきの安易な妥協性から、ひねり出されて成立しているように思われる。そこから社会福祉の思想こそが、実践へと導く主体的な内在論理であり、底流として、あるいは、その思想という土台の上に社会科学的視点にもとづく社会福祉理論が支えられ展開されることによって社会福祉の主体性と実践性が確保されるという論理である。

ところで、マックスウェバーの考え方は、明らかなように「現実的な生の一断面」、すなわち、歴史と社会の中で行為・活動する人間の主観的な動機や態度を、主観主義的ではなく客観的な因果関係の解明という操作を通じて社会科学的に認識把握しようとした。このマックスウェバーの科学的研究方法論が社会科学的と呼ばれる所以は、そこには「現実な生」を生きる人間が歴史性と社会性の中で認識把握されていること、さらに人間の社会的行為における動機を重視しながら、それを主観主義的に認識把握するのではなく客観的認識へと方向づけたこと、そして、関連的にこの種の論理が陥りがちな目的論的思考を避けて意識的に因果論の体系へと組

み替えたことなどである。それゆえマックスウェバーの考え方の中には、ウェバー自身が主観的な動機や態度を強調するからといって、ただそれだけの根拠でウェバーの理論体系を主観主義的観念論と批判し葬り去ることは誤りだと言わざるを得ないであろう。それは主観的なものを選択しながらも、それを客観的な因果関係そのものの認識の対象としたことにこそウェバー自身が目指すものがあったからである。また、学問の領域においては、物事の因果関係の客観的認識の場であるという理由で、このルールを厳格に死守することをウェバー自身は要求したが、その他の社会生活や政治の局面では、誰よりも特定の価値を選び取り、その実現に向かって努力すべきことを強調したのである。そこから社会福祉理論における主観的な動機の強調が、マックスウェバーの考え方を拠り所としながら、荒削りで素朴な受け止め方で主観主義的に、あるいは、目的論的に提示される場合があることに気をつける必要がある。もう少しマックスウェバーの考え方についてみておきたい。こうした考え方からも理解されるように、マックスウェバーは価値判断、つまり、世界観の、学問（科学）という特定の場における押し付けに対する禁欲ということを主張するものであって、全ての人間一人一人が、ある特定の価値判断（世界観）を否定するものではなかったことに注意する必要がある。そのウェバーのいう禁欲のために、その社会科学的研究方法論には外観的には表面的には現象的には、価値判断が入っていないか、表立った形ではあらわに浮上してこないが、しかし、ウェバー自身も明確に意識していたように、全ての人間は何らかの価値を選びとることから自由ではないはずである。というのは、客観的認識それ自体が、一応、没価値的であり、価値判断（世界観）から解放されていると仮に仮定したところで、没価値性という価値判断（世界観）を、選りどっていることの自己矛盾の告白から逃れることからはできないはずである。また、ウェバー自身が個人と社会との関係性において、個人の動機や態度を中心的課題として拾い上げたことは周知の事実であるが、その関係においては社会的諸個人の集合から成り立ちながらも、どの個人からも相対的に独立の総体としての社会が、それ自身固有の性格と運動を持つという因果関係と法則性の発見と気づきに目を閉じたままであった。というのは宗教をはじめとする文化的な諸問題といった上部構造に関する社会科学の認識を深めたことには大きな歴史的業績を残したけれども、その土台、すなわち、下部構造自身のもつ社会科学の分析を探究せず、いわゆる下部構造から上部構造へ、そして、上部構造から下部構造への反作用について深化した研究がなされていないのである。まさにこの視点・認識・理解において、ウェバー自身とカールマルクスとの大きな差異があるように思われる。マルクスは、資本主義的生産関係のもとにおける個人と社会との矛盾の統一関係の中における社会そのものの相対的独立性と、その中にうごめく固有で独自な法則性や因果関係の発見にこそマルクスの残した大きな歴史的業績があるように思われる。

だから、ここで思想（近代的精神、世界観）を土台として理論を上部構造的に支えることが実践的であると、この思想を強調する者は言っているように推測される。こうした考え方は、ある種、何かウェバー的な思考方法が取られていると考えられる。けれども、こうした主張は

思想（世界観、価値）を客観化し得ないか、または客観的理論それ自身は、思想的（世界観的、価値的）な空白性があるだけだと思ひ込み、だからこそ客観的認識の体系的組織的表現である理論それ自身は実践的であることはできず、それゆえ、そこからそれに思想を追加し理論の土台に据えることによって、はじめて実践性を獲得できると考えているのである。すなわち、社会福祉における社会科学的認識を本質的に承認しながら、思想性（世界観、価値観）、主体性、実践性の欠落に大きな不満をあらわにしているのである。しかし、歴史的に創造されてきた社会的人間の主体的な能動性を織り込み編み上げた上で、社会科学的認識にもとづく社会福祉の総体の客観的認識がなされていることを忘れるべきではない。

以上のようなことから、優れて理論的なものはそれ自身実践的であるという、すなわち、実践を基礎にして理論が編み上げられ、それがまた実践の道標となり羅針盤として役立つことになるのである。主体的なものが客観的なものの中に投影され自己実現していくという意味においては、客観性は主体性そのものが客観性の中に注入され投影されているという、つまり、客観性は主体性それ自体が対象化された表現であると言える。そうであってこそ理論はそのまま実践であることが可能となる。その点はまさしく感情が概念・意味の中に浸透し自己実現することによってのみ、真の意味において感情・意思となることができると同じことである。そこから、すなわち、社会福祉という世界において、主体性を主張し強調したいならば、社会福祉の科学的・客観的認識の確かさの中に主体性を投入し、その理論を検証し、誤診がなければその上に立って深化と前進に備え、逆に誤診があれば、理論を修正することによって完成に努め、そうしたことの総体の中で社会科学的認識や社会科学的法則性の指示に従って、日頃の社会福祉活動を進めることである。すなわち、具体的には社会福祉政策の実施や、個別的保護活動、そして、集団的保護活動、さらには組織的行動といったものを進めることである。その中には客観性と主体性それ自身との分裂や、不自然で整合性のないやり方でもっての結合や、見せかけで論理的証拠のない虚構に満ちた統合といったものの必要性はあり得ないのである。換言すれば、客観的なものが主体的なものを客観的なものの内に溶け込ませて、主体的なものを客観的に対象化しているからである。それこそが社会福祉における理論と実践の統一であり実践の土台の上に考究され洞察され、そこから整合性を有した理論が実践の羅針盤として体系化され、その理論に方向づけられた実践が社会福祉の水準の高揚と内容の充実化を促進させ具体化させていくのである。そこには思想（世界観）がこの論理的過程から遊離したところに先天的・生得的に存在しているのではなく、人間的な生の全現実を、そのありのままにそのあるべき本来の姿で表現されるはずのものとして、社会生活の実践を基底とするところの実践と理論の相互交流の中から思想（世界観）が昇華され、同時にそこから思想（世界観）が結晶していくものであり、それゆえ思想（世界観）それ自体が流動し発展していくものとして、常に、そして、いつも実践と理論の検証に曝されているものであり、そうであることによって、究極的に思想と科学（学問）とは統一されたものとして存在しているものなのである。

〔注〕

- (1) この科学と理論の認識把握したいものが「対象化された生」であることの具体的な説明については拙著『今日の社会福祉における本質的对象認識の分析—歴史的社会的必然性の認識と法則性の発見を求めて—』（文理閣、2018年）の第6章を見ていただきたい。
- (2) この本質と現象との関係性の具体的な内容については、拙著『社会福祉の本質への接近』（文理閣、2006年）の第6章と第7章を見ていただきたい。
- (3) この社会科学的研究方法論については、拙著『社会福祉の根本的問題—社会科学的研究方法の本質的解明をめざして—』（文理閣、2013年）を見ていただきたい。
- (4) このアメリカ社会福祉の問題点については、拙著『今日の社会福祉における本質的对象認識の分析—歴史的社会的必然性の認識と法則性の発見を求めて—』（文理閣、2018年）の第9章を見ていただきたい。
- (5) この社会福祉の思想こそが、実践を志向するための主体性の内在的論理であるという主張は、社会福祉の「歴史・思想」を研究する者たちの立場から論じられる場合が多いと思う。つまり、社会福祉の思想（近代的精神）が多大に浸透した実感的な歴史的・社会的実践を求めているのである。また、例えば、吉田久一氏が書かれている書籍をみれば、このようなことがよく理解されるであろう。

（すえざき えいじ 社会福祉学科）

2020年10月20日受理